

茨城教育研究所通信

第22号 2011年8月18日
発行 茨城教育研究所
〒310-0853 水戸市平須町1-93
(茨城県高等学校教職員組合内)
TEL 029-305-3075 FAX 029-305-3317

〔巻頭言〕 特集「農と教育」を考える

農の持つ教育力

農業科の実践で有名な福島県喜多方市立熱塩小学校の児童たちが、全農研の大会で報告をしたとき、こんな言葉でしめくくっている。

「ぼくたちは、自然の恵みをもらい、農作物を育てる中で、たくさんの命をいただいていること、そして農作物、自然、人に感謝する心をもつようになりました。農作物がどんどん成長していくのを見守るのは、楽しいし、収穫した時のよろこび、食べる時の感激は忘れられません」。

農の持つ教育力は、この児童たちの言葉の中に端的に表れているだろう。茨城大学の中島紀一さんが書いた本のタイトルのように、『食べものと農業はおカネだけでは測れない』のだ。

「土」の意味

画家の宮迫千鶴は『海と森の言葉』の中で、こう言っている。「土は畑の作物を通して私たちの生命を養い、私たちの生き死にそのものを循環させるものであり、土があることによって私たちは『今ここに』いることができている」。ところが、都会生活をしていた頃の彼女は、「市場に行って並んだ野菜を眺めても、その野菜の向こうに土を見ることもない荒っぽい生き方をしていた」。そんなある日、ある人から「鉢植えの土でもいい、できるだけ土に触れていなさい。そうでないと土いじりをしていない人は「往生際が悪い」と諭されたという。大人の場合が「往生際」なら子どもの場合には「育ち」だろう。宮迫さんが言うように、子どもたちが「自然に育つことを学ぶのは、自然しかない」のだ。

「生物育成」の必修化

来年度から中学では「生物育成」が必修になるという。この「生物育成」を有名無実にしないうえにも、かつて山形県で食農教育を実践した小学校長の伊澤良治氏が、その実践指導のむずかしさにいらだっていた先生方に語ったという次のような言葉にはじつと耳を傾ける必要があるだろう。

「けっして本物の農業をする人を育てる教育ではないこと、立派な農作物を作ることが目的ではなく、人間が手を抜くと厳しい結果が出ることを学んだことは重要なことだ」。
(「教育」2006年9月号「土と地域に学ぶ教育」)

農業が子ども・若者を育てる 普通教育における小中高一貫の農業教育の 実現で教育の再生を

1 農業教育の持つ教育力と農業教育への期待の高まり

最近、農業の持つ教育的な意味が各方面で取り上げられてきている。作物を育てたり、動物を飼育することで、自らも成長することや、共同で作業することで、仲間と協力する力が養われる。作物を作りそれを自分たちで調理して食することは、本当の意味で食と農の教育になり、作る過程で様々な道具を扱うことで生きる力をつけることにもなる。勿論それらの過程の中では、仕事の辛さや、失敗も多い、そうしたことを経ながら本当の意味で作る喜びを感じることで、自ら汗を流して働くことの大切さを学んでいくものと思う。

農業教育は主に、農業関係高校で取り組まれているが、小学校や中学校でも取り組まれつつある。特に小学校では、「総合的な学習の時間」（2000年、平成12年より段階実施）や学校行事などで、農業体験が取り入れられたりしている。内容的には農業体験的なものが多いが、本格的な農業科を小学校で取り組んでいる事例もある。中学校では新教育課程で「技術・家庭科」の中で「生物育成」という分野が必修化され、平成24年度から各学校で農業に関わる学習が取り組まれることになる。中学校での農業教育の実践は少ないが、先行的に取り組まれている所で、成果をあげている例もある。また農業関係高校だけでなく普通高校でも取り組まれている（工業高校で農業選択学習の例もある）実践もある。今回これらを紹介しつつ、小中高一貫で農業教育に取り組む契機とし、その参考になればと思う。

2 小中学校における農業教育のとりくみ

福島県喜多方市では、全市の小学校の教育課程に「農業科」を導入し取り組んでいる。その中で注目すべき実践として、喜多方市の**熱塩小学校の実践**を紹介する。

1) 導入の背景と支援体制

熱塩小学校は福島県喜多方市の北に位置し、全校児童60名ほどである。周りは有機農業の盛んな水田地帯で、地場産の減農薬・無化学肥料の野菜を取り入れた、完全米飯給食を1989（平成元）年からスタートし、20年以上になる。

喜多方市は構造改革特区で「農業科」の設置を選び、市長の発案で2007（平成19）年から市内小学校3校から「農業科」の取り組みを始めた（平成22年度は18校中17校参加）。子どもに農業を学ばせるべきだと主張するJT生命誌研究館の中村桂子氏に共感したことがその動機だと言われる。

「農業科」には、教員および子どもを指導援助するために、地域の農業者である「農業科支援員」（熱塩小学校は2名）がおかれ、まごころ野菜の会、ひめさゆり栽培の農家等々、地域の学校は地域の手で、みんなで子どもたちを育て、地域が共同して子どもたちの教育を支えている。

「農業科特区」は平成19・20年度で終わり、現在1・2年生は「生活科」（年間25時間）、3年生以上は「総合的な学習の時間」（年間40時間）で「農業科」の学習を実施している。

2) 何を学んでいるか

農業科の目標には「自然との関わりの複雑さについて理解し、他の生き物との共存すること」を学ぶ、「食べることを理解し、生命の大切さを理解する」さらに、「農業に必要な気象、土壌、生物等の基本的知識」を習得し、「農業生産を計画的に取り組むことができる」が掲げられている。

授業内容は、土づくり、種まき、除草、肥料・水管理、収穫、加工・調理に至る農の営みの全過程をおこなう。

3) 子どもたちの声

— 農業科の学習を始めて4年たった、私たち6年生の感想です。

「食べものを大切にし、残さないようになった」

「友達と協力する楽しさを知った」

「農作物や食べものを育ててくれる人に対して、感謝の気持ちを持つようになった」

「家で手伝いをするようになった」

「自然が好きになった」

「命の大切さに気がついた」

私たちは、農業科の学習を始める前、「お米は人が作るもの」だと考えていました。しかし農業科の学習をとおして、「お米は人が作るのではない」ということを学びました。お米を作るのは稲です。そして、私たちは、稲がお米を作るのを手伝う。稲を育てるのです。農業科の学習は、基本的な考え方を学ぶところから始まりました。

4) 「農業科」の取り組みをどう捉えたか

子どもたちは稲を「いのち」としてとらえている。いのちの大切さを学んでいるのだと、子どもの作文の中に、「私は田植えをしながら、いのちを植えているんだな、と思いながら作業を進めている。植えたいのちは月日と共に成長し、大人になっていきました。」

稲を育てることをとおして、いのちを育てる大切さを学ぶと同時に、その一方で自分自身が育てられている。

二つ目は、こういう実習体験を通して、労働することの意味を理解し、職業に対する意識形成の場にもなっているのではないか。学校農場という教育的に組織された場で、一連の作業をとおして、労働の辛さや協力して働くことの意味を感じ取っている。そういう中で将来の職業に対する意識も育っていきつつあるのではないか。

三つ目は、地元の有機栽培で育てた、安全安心の地場産給食が、子どもたちに「本物の食」を味あわせている。これは、子どもの時期だからこそ、とても大切である。このような食の体験は、将来、日本の農業を大事にしていかなければいけないという気持ちと同時に、「食料主権」～自分たちの国の食料は自分たちの手で～の意識の形成にもつながっていくであろう。

この喜多方市の取り組みは、最近埼玉県内の小学校で取り組みが広がりを見せ、

長野・小海町でも実践する動きとなっている。

(注)境野健児氏(福島大)は、旧熱塩加納町の取り組みを評して「今の時代に人間が人間として自分を作っていく上で、とても大事な課題に農が据えられている。農の営みによって人が人になる時代に入った」と農の持つ教育力を強調する。同氏は、30年以上に渡って旧熱塩加納町の取り組みをフィールドワークとし、子どもが育つ地域論を探求している。

3 中学校における農業教育のとりくみ

中学校で農業に関する科目として「技術・家庭科」の教科で扱われてきた「栽培」は、1977(昭和52)年改訂以来、選択領域となり選択しなくともよい領域とされ、その存続が危ぶまれてきた。選択する学校はわずか5%という状況であるが、2012(平成24)年から始まる新しい学習指導要領では「技術・家庭科」の「栽培」が「生物育成」に変わり、必修になった。これは、農・環境・食の問題を背景にしていると思われるが、動物飼育や水産物に関することまで含まれる。この新しい展開は、すべての中学生に対して、その実技・実習をとまなう「生物育成」の指導をとおして、日本農業について正しい認識を育てる端緒と考えている。ただ、多くの技術科教員には、初めての経験であることから、全国農業教育研究会(全農研)会員が中学校の担当予定者に呼びかけ、栽培や飼育の基本について農業教員による公開研究会を実施したりして中学校技術科教員と連携しながら進めている。

ここでは中学校技術科教員として、長年「栽培」を子どもたちに教えてきた大阪の先生の実践レポートを紹介する。

1) 実践レポート(全農研大会で報告)

もろこしの真珠になりて輝けり

赤木 俊雄(大阪・中学校講師)

表題は手塩にかけて育てたトウモロコシの、皮をはいだ瞬間に感じた気持ちを、そのまま詠んだ生徒の俳句です。袋栽培3年目の報告です。「生物育成」の学習は、三つの喜びが体験できます。一作る・収穫・食べる一 今回はそれに加えて、美しさに感動する喜びも体験しました。手塩にかけて育てたトウモロコシが、朝日の中で光り輝いています。「自然」と、汗を流した「労働」が作ったものです。「自然」+「労働」の成果です。

自然の生き物や天候などにより、100%の完璧なものではできなかったが自分が頑張ったことをほめています。いびつな形にも愛着がわきます。満足感があります。昨年より、授業の感想として、川柳、俳句などを作るようにすると、自然や労働について「学校農園の詩」ができました。

学校には農園を作る余地はないので、一人一袋の「袋栽培」を考えました。自分の分担する作物がはっきりしているので、生徒の責任感は集団作業よりも出てきます。観察や世話も熱心です。作物の要求に合わせて、日なた、日陰に移動することもできます。土を深く耕すこともありません。袋一つに、1学期はトウモロコシ、2学期はだいこん・ジャガイモ。トウモロコシは4月下旬にポットに種をまき、5月連休明けに苗を袋に植えつければ、夏休み前に収穫できるので、学校での栽培にむいています。できたトウモロコシは、ゆでて食べれば、その新鮮なおいしさに驚きます。

中学校で食料生産を学ぶ教科は、「技術・家庭」がただ一つの教科です。飽食日本、自給率最低の国、食に関する事故が後を絶たない日本、このような世の中だか

らこそ、食べ物がどのように作られ、消費者に届けられるのか、義務教育でしっかりと教えることが大切だと思います。

2) 生徒の感想より

A子：私は家でとうもろこしを1回育てたことがありました。しかし、そのトウモロコシは失敗でした。だから、学校で作るときは絶対おいしいものを作ろうと気合が入りました（笑い）。土づくりのときに「みみず」を入れて、いい土になるように工夫しました。

お水やりの水もたくさんあげました。そして、私はみんなより少し早く収穫して1本食べました。すごく甘く美味しかったです。そして調理実習では焼きトウモロコシを食べました。初めてで、すごく美味しかったです。今度、屋台のものも買って食べたいと思います。今回は作ることの大変さがよくわかりました。今度はもう1回家でも作り成功させようと思います。

昨年の失敗とは、小学校の弟が学校からもらってきたトウモロコシの種を植えましたが、収穫すると、硬く、歯抜けが多かったです。考えられることは、授粉がしづかりできなかった。

B子：育てるのは少し難しかったけど、だんだん育てていったら楽しくなりました。収穫して、皮をめくってみると、粒になっている部分と出来ていないところがありました。ちゃんと育てていたらちゃんと出来ていたのかなって思いました。

とうもろこしは 1、穀類 2、野菜 3、飼料 と3つの顔があります。A子さんは取り立ての生も食べました。甘くて美味しかったそうです。他の人は生で食べられるのか心配していた人も食べてみて納得しました。サラダで食べたのですね。自分で栽培すると新鮮な食材から新しい料理を発見する楽しみがあります。

4 普通高校における農業体験学習

普通高校における農業体験について、「総合的学習の時間」を活用した新潟県立阿賀野高校の実践を紹介する（「農業教育」農文協刊。No.78、2009年5月号から引用）。

当校は、1991（平成3）年農業科を廃止した旧水原高校が、2005（平成17）年近くの安田高校と統合して阿賀野高校に改称、5学級規模の普通高校である。学年主任がかねてより「体験的学習により生徒の活発さを引き出し、高校生活全般をいきいきと過ごせるように」と、かつての農業科時代の実習田を利用して農業体験を実施してはどうかと、4月当初1学年担任団（副担任と合わせ12名）にもちかけたのがきっかけである。

その目的を

- ①農業活動により農業の苦勞と収穫の喜びを体験する。
- ②耕作放棄等の自然環境問題について考えさせる。
- ③OB等の協力を仰ぐことにより異世代交流を体験する、とした。

実施に向けた計画づくりには旧水原高校のOBの力をかり、さらにそれまで荒地だった水田を耕地にする作業（トラクター等）にも協力を仰いだ。スコップ等の作業用具も近くの農業高校から借り受けた（面積1024㎡、学校から徒歩で約20分）。

除草作業から始まった農作業では、普段聞かれがちな「えー面倒くさーい」「だりー」という言葉ははず、積極的で楽しみながらの光景が見られた。栽培作目は「枝

豆」、OBの手ほどきを受けて畝づくり、定植をすすめた。収穫時は、担任・副担任も生徒たちと一緒に予想を超える出来ばえと収穫量に喜びを共有しあう。

阿賀野高校として初めての農業体験学習は、2009（平成21）年度から行われる「オンラインワンスクール事業」として、「耕せ 阿賀野！」をコンセプトに、継続して実施することになった。

5 すべての普通高校に 「職業・技術教育」としての農業教育を

いまや農業体験学習や環境教育は当たり前の時代になってきた。全国農業教育研究会は一般的教養としての農業教育を、「農業教育の国民的課題」の一方の柱として掲げているが、それは社会全体の流れとなりつつあるし、そうしなくてはならない。

1989年ユネスコ第25回総会で採択された「技術・職業教育に関する条約」によれば、普通教育の一環として「技術及び労働の世界への手ほどきを与える技術・職業教育を行うべき」とされ、実際にイギリス、フランス、ドイツ、スウェーデンなどヨーロッパ諸国では第1学年から10～11学年までのおよそ10～11年間、普通教育の一環としての技術教育が提供されている。

「農業教育をすべての普通高校に」とはいつても、現実には、実習場の確保や道具の問題、さらには指導者の問題など課題は山積している。一気にすべてが解決できるとは思わないが実現可能な学校から手がけ、その実践を広めることで道はつくられる。その際、前述した阿賀野高校の実践のように、地域の農家やOB等の力を借りながら進めることで、地域に根ざした学校づくりへと発展できる。

《参考資料》 袋栽培の方法

編 集 後 記

3月11日の東日本大震災を高校生たちはどのように受け止めたのだろうか。多くの高校生たちの平均的な受け止め方は次のようなものだった。

◆「水も電気も止まり、今まであたり前だったことが全て失われ出来なくなった。大震災を経験するまで、私は日々の生活の中で節電やこまめに水をとめるなど、そこまで意識して生活していなかった。水をだしっぱなしにしている、何も思うことはなかった。しかし水を自由に使えなくなっただけで、水の大事さが痛いほど思い知らされた。毎日水くみに行き、お風呂も入れなく、自由に水が使えないのを一ヶ月程経験して、本当に苦しかった。水が出た時のあの喜びは忘れることはないだろう。この大震災を通して、毎日あたり前に生活できてきたことが、生きているうえで一番の幸せなんだなぁと考えるようになり、水も最低限に使おうと強く思うようになった。」(高3女子)

また、これまでの慌ただしい生活の中で、私たちが何を見失ってきたか、改めて気づかされた高校生もいる。

◆「私は3月11日に起きた東日本大震災を経験して、家族の大切さを実感した。地震当日は学校に居たため、家族に会うことができなかった。次の日に家族全員に会えて、ともに安心した。友達も大切だが、生まれてから17年間一緒に過ごしてきた家族は、一番大切に必要存在だったことに気づかされた。停電と断水が続き、家にあるだけの食材で分担して料理をし、真っ暗の中懐中電灯の光だけで食べる夕飯は、とても美味しく感じた。普段は家族全員でそろって食べることがないため、嬉しい気持ちでいっぱいになった。『悪いことがあると良いこともある』という言葉は本当なんだなぁと思った。」(高3女子)

さらにまた、「命」について考えた高校生は多かったが、命の重みをこんなふうに考えるようになったのも、この大震災と直面したからだろう。

◆「私は3月11日におこった東日本大震災で、ある一つの出来事を目にした。おばあさんが言った一言が今だに心に残っている。それは、『私が生き残って申し訳ない。若い命を奪うなら、私の命を奪ってほしかった。』と言った言葉だった。この言葉の意味を考えていけば、どれだけ幸いのかなど、私にも少しぐらいは分かった。でも、若い命、あと少ししかない自分の命を比べてはいけなと、そのおばあさんに言ってあげたかった。」(高3女子)

東日本大震災での被災者数は、8月11日現在で死亡15,690人、行方不明4,735人(警察庁発表)。一人一人がかけがえのない命だった。長谷川権の短歌「かりそめに死者二万人などといふなかれ親あり子ありはらからあるを」。

尚、今号は全国農業教育研究会(全農研)会員でもある高栖所員が中心になってまとめた。(文責・程塚英雄)